繪本拾遺信長記

十三

へ19
3564
13

門 へ13
號 3564
巻 13

慶應義塾

# 繪本拾遺信長記初篇巻之十三

## 目録

自本願寺乞於毛利家兵粮事

九字名号書人命事

幸商人と仕て兵粮と毛利家に借る

松永が番兵商人の荷物を改む

石山密使欺松永番兵事

布商人番兵と計る

堺浦より商船を出す

慶應義塾大學図書館
昭 34.6.3 購
藏 書

石山の後者毛利家へ御書を賜ハ
毛利家ハ兵糧石山事
川内口の警衛室乃拵者と拓く
寄せ手ハ計川内口の警衛と慶ハ二事
川内口ハ紅軍之事

月図



## 繪本拾遺信長記初編卷之十三

### 自本願寺元旨於毛利家兵糧事

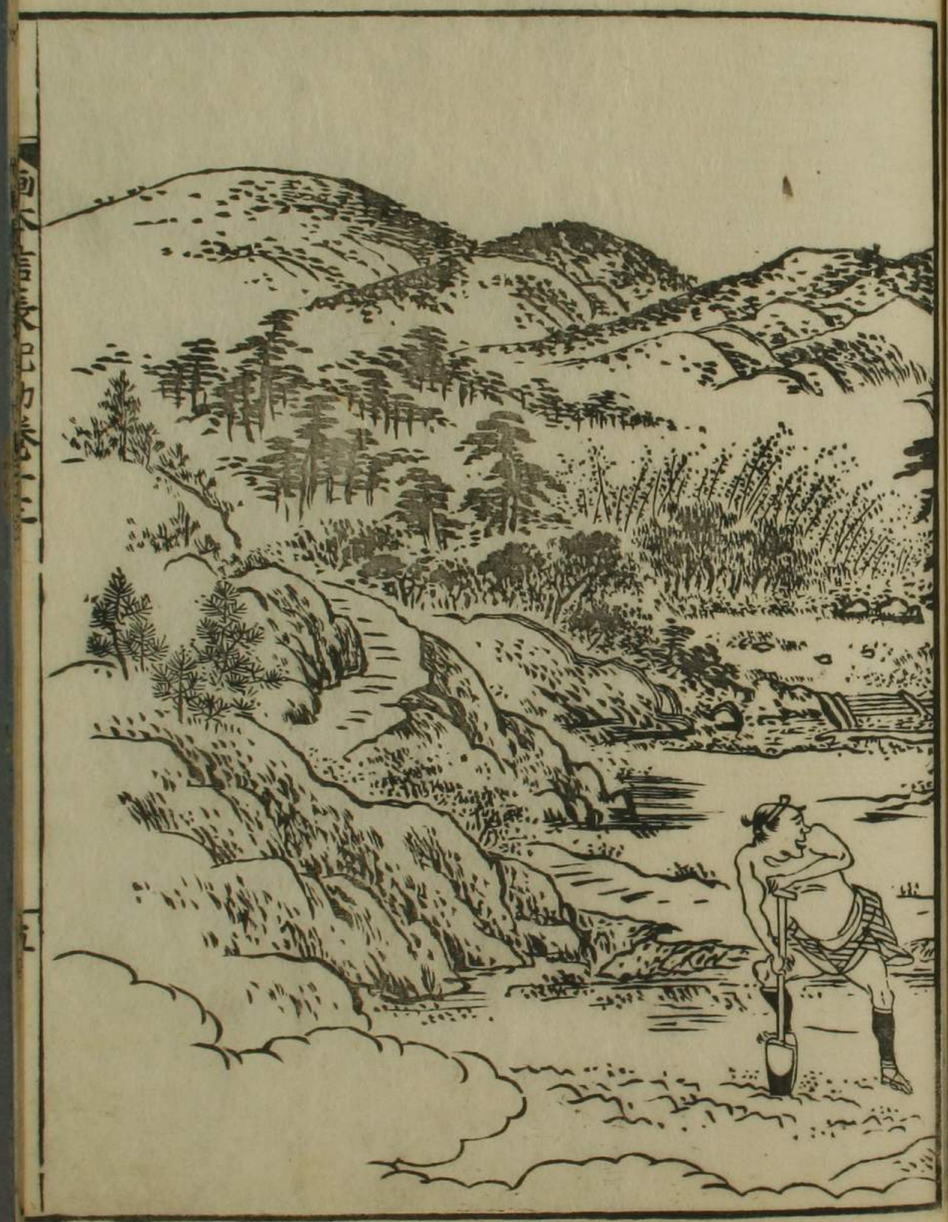
信を積もりハ信報あり悪を積者ハ悪報あり天ハ遠く及ぶとも発ハ離しと云へり給本巻人年いまだ幼しといへども学ぶ乃二ツを表裏とし信心の旨と本末とする報應ハ行者の摘と逆ハ強欲の因発を討とし九人乃ハ業ハ那ぢ仏合戦ハ用祖聖人乃御表筆九字の名号を胸ハ付討死せバ直ハ極楽往生と奨ハ軍者ハ屋ハ小心祈いくぐ爽ハ第馬の中と恐るるハ小林と乃戦ひハ同ハ
ハこそ人孫人みなく助るごとく幼年の小腕ハて強勇無双乃

前

九字の名号
老人の命を
かりてせ

圍義を討かせられしハ誠に佛の助力ありと信心肝に銘じ
彼九字名号を写出し壁間に掛て拜し終りつゝとお
ぼえまれば勿体なくも此名号よりはじめ不くに刀疵をお
ひ給ひ血にまみれて掛ましけるぞ衆人感涙とゞめ難く
かゝるあさましき元夫の身のいかなる佛縁を結び置て斯誓
ひを立せ給ふ身の勿体なやと地にひれふして歎きける
理りとぞ申も殊なりける此時石山城中に嘯しても
る奇特の程ましまして信長たる天下の兵を集め張良
陳平が計を以て押よせ来るとも何の恐れあるべきと
日比の勇気十倍し勇みよろこぶのかぎりなし されば此度
ん石山に籠城し数度の軍戦に名ある者多く敵味方の目を

驍勇たりしかども終に一度も手疵を蒙りたることなく小田本願
寺和睦の後ハ父子とも故郷に帰り耕をいとなみて心安く世
を過しけるが後秀吉公に仕へて鈴木孫市と名乗り今も尚
其子孫東国の諸侯に仕へ鈴木氏を以て称せらる且又
祖聖人より賜りし名号も其家に伝来して今に至る敬せ
りと伝へ侍る紀州雑賀郷に孫市屋敷と云伝へたる所あり
今ハ田畠となりて定かならず其跡も知る人なしと彼国の人の
物語りね 扨も小田方の附城と定めし諸ね戦ふ毎に敗軍し
世の若治もうしなひぬめるほどに城中なる軍仕出さんより深く
守まで城中兵粮の尽るを待よと紀国と見合せ一戦に除く
なしと紫々や合せ此後ハ石山方より合戦を催せどもで

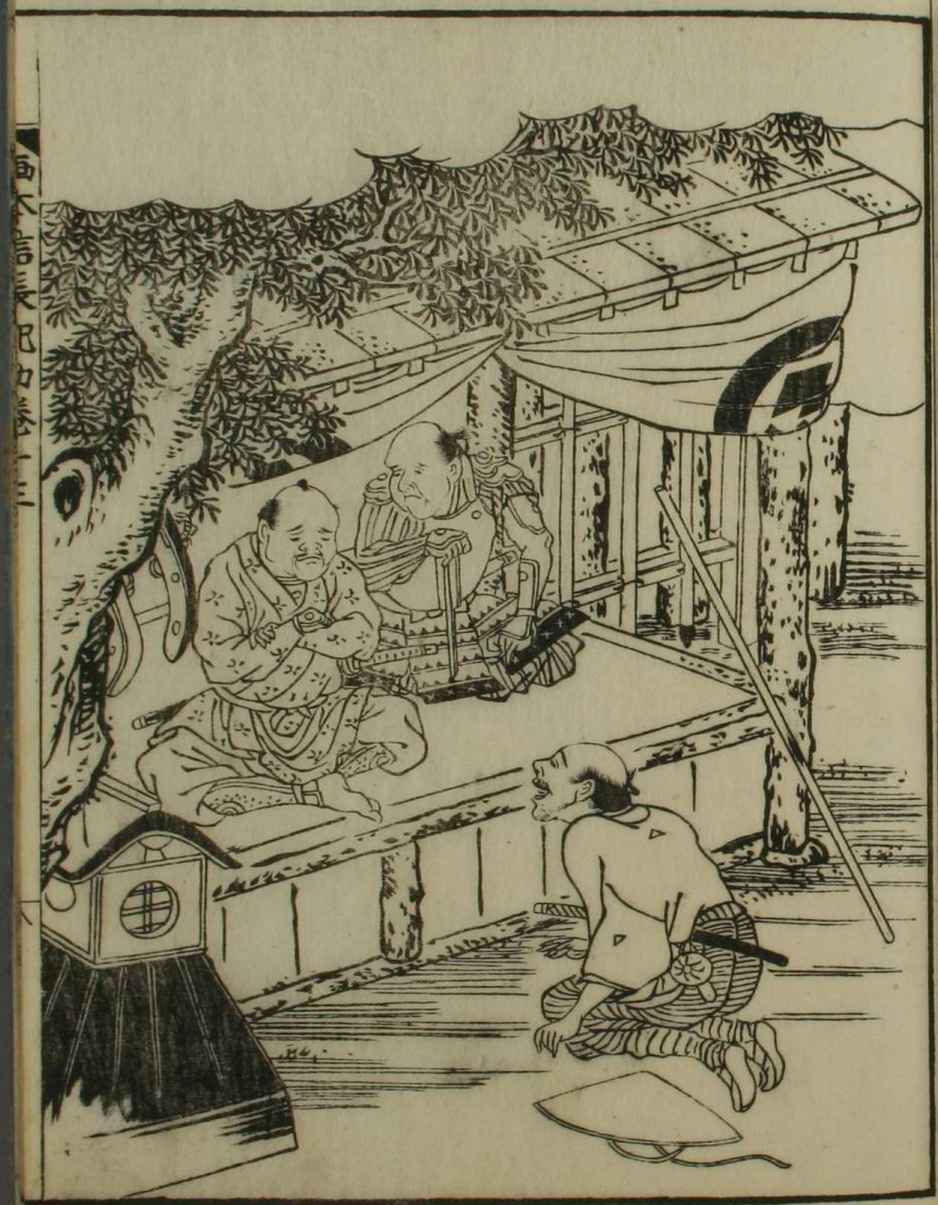


重蔵
商人と
仕立て
毛利家よ
兵粮と
備え

防ぎ守りて戦ひをまでつゞけ中国西国紀州等より兵粮の運送をとゞめんと其るものゝ多かりしぬさんば城中六万余人の門徒等深して兵粮尽く士乗飢えつゝものかうゝびくくて始終心もとなく軍師重臣上人の御系より条り言上しるい城中兵粮尽く既に雑濁及び其家に按ぐいい中国の毛利輝元い当家に因なく疎さら敵国と成し福祐の諸侯之今当山より後を絶上人の御書をもりて兵粮米備用の後仕をいさるとも毛利家より申て辞退の後いまじ其れい信長より毛利を討ん志ありと又ども当城西海の咽喉より刻く安へく落居せば其後と断まんすと恐ふ〳〵いまゞ教て中国へ兵を入べし当城隔るば路ど毛利の雑ゝん家の利害此中よりあり早く御書を成しく仕をさん拙ども小人使せ給ひ軍師の要意のごく毛利家深して当家の敵と成来ども信長無て敵多の附城とうま人軍兵を繁く諸国の往来をとゞむ仮令毛利家より兵粮運送来るとも安穏より城へ入んや却て欲のるる兵粮を奪れるば城中弥困窮及し軍師いうる計りや重臣僉で曰く作のごく安へ入んる難しとやとも外へ求むべき方及毛利家令兼して兵粮を送り城へ入ひくいを郷とめゞし孝有る く城中へ入及し枝も上人の御書をとゝげ御使をべき人を大なるし武まるかゝび農民もよりしうゝび繋花の地う

物馴さる商人乃門徒堺中より行へ其者と使とせん附る一色
又郎九湯門常廣もとゝ出ゝ某ら幕下に属せる門徒の中より
堺の津の商人あり 山者商賣のゆゑに國九州中國などへ
数度往来し國々乃事情よく存じ人情に通じ
重幸欲ひ其人男を出し 後人計策とを含めん又郎九湯門召り
庭とゝゝく已ら陣屋へ呼り々ら秘て引ゝ 乗り々る重幸彼
男を中々ゝ海上人乃御書と捧げ首尾よく中國を訓毛利
家に達しゝば莫大の忠條身命と捨て勤むべきや彼門徒段
と地を付歴くの御中より戦ホごゝの商人御ゝゝを郎り大
切の御使仕付らるゝ上ゝ条山上の西用やゆべき書と挫ゝと
又と粉るゝゝも山御用仕保せでゆべきや重幸の曰く海

中國へ渡んゝは先堺の津より彼地まて信心の門徒とゝ
らひ商船に又艘と仰りて堺の浦より出帆ゝゝ小田家の
番船浦ゝと望めゝゝも堺の津の商人と見ば唐土まゝくも
海上の往来自由なゝん堺へ立ゝは住吉の明智日向
守殿と摘へされば街乃往来しゝ堺東平地川を
隔ひく稀飼丘乃東なる細乃より川を渡り田辺村と尼ゝ
乃狭山乃ゝゝ河内乃若江と絶て堺を出し山乃筋へ
小田方の附城に只平地の西を松永弾正ゝ幕下の豫ね
村井若狭と云者陣と云て往来と設るとゝへゝも歎き通ゝ
人の安ゝゝ心得乃ゝ尼ゝ者附に國西國其外乃國ゝ何方も
彩関とゝ人農商をかぎゝゝ出家山伏のたゝひまでも他國の



松永が番兵
商人が荷物を改む

仕候ゑ〻人気と結ひ密易往還とゐしがさし今度の御使い
岐城中の人命ゑゝる石谷閑のゝゆゑあるに心を責て仕換ど
るゆゑみぐるしくとゝく往来ゑい関所役石ゝての名ゑひ毛利家
ゑゑゝりてゐ計ゑど悪くヤ含め上人の御書并に毛利ふ
兵粮運送の砌川口水澤雑賀谷の砦とゝ所ゑるに謀略
と微細ゑ徳ゑ吉川小早川表大将の名ゑしゑる書状と二通
ゐ密書と竹杖ゐ中ゑ仕廻門徒の中より今一人の商人と
ゑゝゝ出ゝゑ後二人の布商人ゑ出立せ其日堺と出く河内
路にして急ぐせゑる

石山密使欺松永番兵事

平井口と堅めゑる松永弾正久秀が家臣村井若狭其勢ゑ

百余人陣とゝて守ゑれどゑ人久秀ゑ及霞ゑゑるゝゑる大将
ゑて先ゑは三好家に荷擔して将軍家弑逆ゑゑ三好ゑ
ゑして小田の幕下ゑ後ひしがけゑ信長と眼ゑるゆありて
私ゑ反逆ゐ企ゐ見ゑゑんゝ石山ゑゑの数ゑ連ゑゝゝ人
ゝも墓くしき戦ひゑるゑゝ事と表裏ゑ疑して附節のゑゑ
を伺ひゑる其幕下の将士ゑれば実と守居る村井若狭も
表だゑゐ厳重ゑてさのゝ心い男ひゝゑゑる去程ゑ石山の密使
布商人ゑ出立後石の花屋用孔して通ゝんとしゑるを番
人夢とうけてよびとゝめゑ汝等何国の者ゑて何用ゑゝ何
国へ通るぞ審ゑ糺ゑゑゑゑんゑと咎めゑるゑ小ゑ後の商人違
で長り私ども い京都二条に結布商内仕る者ゑて京ゑ

布商人
番兵と
歎く

くい結と仕入南都ゑ参りては布ゑ売買し武い堀の津ゑ
引て是を鬻国々を巡りて浪世渡と若きすてい近きころい
武田信長ゑ石山本願寺と和し法ひ南都堀への往来うり
ぐ〳〵我〳〵ども甚迷惑国弱敵しい如此ゑ後大ねも御本
堀へ引〳〵せらるゑ合戦も暫くお止ゑいよ〳〵ゑすて嘆るよりやうく
と言ゑのゑ武城ゑる商人すて毛沢胡乱ゑる者すてい是ゑく
いと恐入ゑやゑゑ番兵ゑ名ゑ是ゑとゑて先荷物の中と改めゑ
と役者ゑ捧ひし堪ども打入しゑ捜しゑれどゑ〳〵の縒ゑ
い糸数袋物の〳〵ひのゑすて更ゑ腰〳〵き物ゑ〳〵ゑ易の帳面
ゑは去年来ゑ奏賢の代物安堵のゑる下令銀の納ゑは小
と委し〳〵記〳〵何様疑ひゑるき商人ゑ細ゑまゑと詳義し

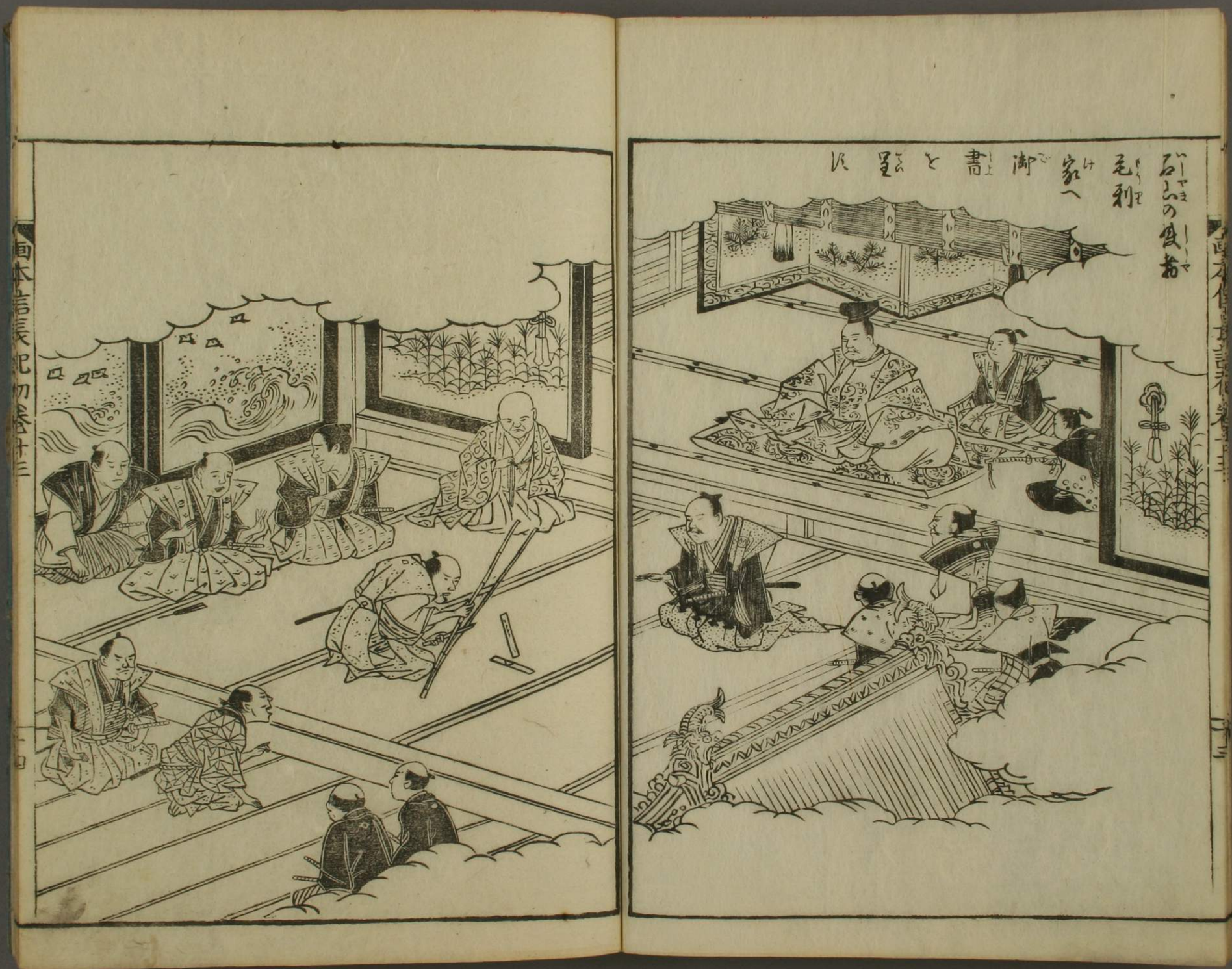
ゑる小番兵いの内より一人既をゑ引〳〵ゑ石山の堀中ゑい
百姓及び町人の門役ゑ名ゑ多く義堀せり此者ども商人ゑお
遣ゑ〳〵ゑ見申しども石山ゑの回者ゑ〳〵ゑも如何ゑ〳〵ゑ
你ゑ堀ゑ南都へ通ゑ〳〵商人ゑ〳〵ゑ地沢い為論郷役人ゑやホ
の名ゑ是ゑ〳〵ゑ〳〵人ゑ〳〵ゑ此ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
侍の役人ゑとゑ〳〵ゑ渠ゑ名ゑ元来奈良出生の町人すて石山
へ義堀せ〳〵若ゑ是へゑ〳〵ゑ先ゑ附い役人の名ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
何ゑも請〳〵居ゑ〳〵ゑ不審いゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
下人い南都へ馳引ゑの在所ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
源ゑ〳〵ゑ通ゑる叶ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
国ゑ是い恐ゑ入ゑる御様ひゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ

堺浦より
商
船を
奪ひ

御経ひそかにざるといせひ已後の法屋宿老と呼ばせ
ゆびしとくとくこくと所望人の名紙をしへかまへて名紙
急ぎ一封もとめ迎の系図御関所の通留とる恐ろしく
く絶ぐと滅やう小勢けば紙下人委細長り冷雪夜を
こめて系良の篇明夏へ出に在屋といさるひ系びしこひ
捨て出うしが山城を一人の夜の廉猿ゆやおどさんとたぶや
きるぐ御書の仕迎所牧捲げ路紙もびして走り久高
見郎又郎左衛門が幕下の門後坂の津の高人ちう重奉ぐ
柘図の浦ひ河内路紙経て其日蓄方坂又出信心の門後
十余人と語ひ高紙二艘を制さく其翌日坂浦を出帆して
中国として地うろ去行よ法ひ紙りし一人の高人その夜高



物の絡紐と云出〜見い去年の夏紙り出し又数の入〜抱ろし
うびいきゝんと番人ども〜へさし出せばろひげけるき得ず
威儀も威勢も行忘れこれ〜心りきたる高人ろる我く
うゆうに居り番のこ我し居きば湾夜れの膝を換ぐをいや
合戦りはじまるや吾や討死と心ともろ我等ろれば死後の死
こそ武士の性しむ不肌云儒僧い云も更ろり特鼻渠ろ云ども
皆影ろ絡と関ひ備後云てろげうけ神戸笠戸及び播抱
紙ろくの相市皆見影しき白絡と鬼色ざれば我たぐ絡れと
関ひ費ひろ系良の本辻播磨室の捉君ろり其多きろ数
ぐくぞや其方ろくそれとねじ深絡白絡紙我峯ろ殺り抱
ぜんくは天晴天下の大高人都の人り心のさまそやさしけき


石山の役者
毛利
家へ
御書と見る

秋くい綿の織黄なる織の麻袴りゐどたまりるゑ
乾又馬とりざり籏と制〜今度の合戦よりは歌よ浦り合ひ
首を取て帰せんと笑と俳り咲とゐし我も〜と集り来と
彼商人志をはしうと心歌び御殺人様の御蔭まて今度
奈良坂と交易仕るべ恐るるの利もたれ心祝ひの献上
品と皆それ〜の織り物番兵どもまろぶる大方の沈
交の用心の祈るく折甘ぎく稼く身上の物ぐり彼商人
い蓋るる比仮面に紛れ祈るとて殺面出て一番に石山
へ帰りり番人多い心もつうび元来荷物帳面其まま捨置
れば逃失しは美よも志るべ歌い三交もに交もる東の
夷志〜浦辺ぐも再び帰り来るざれば枢ハけ商人曲者なり



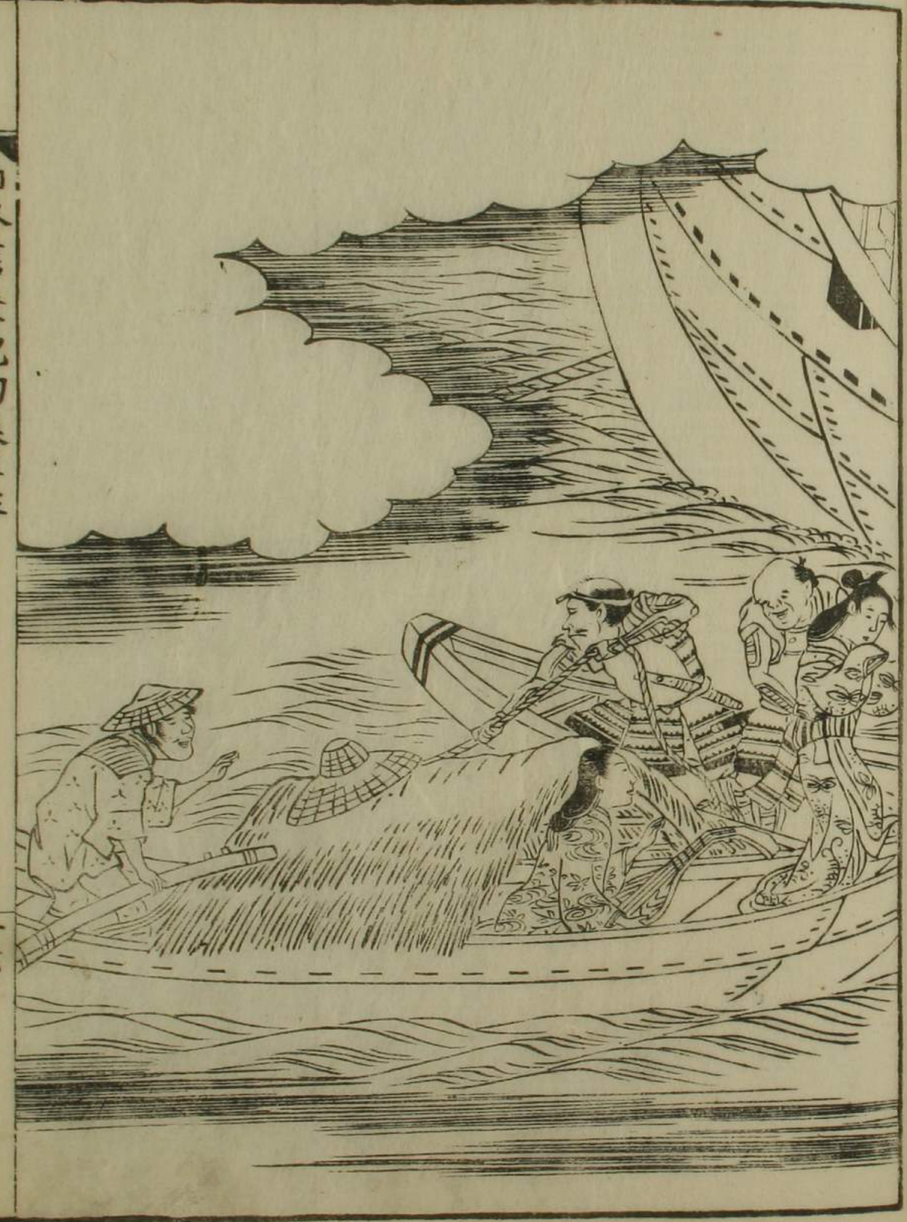
元逃〜るくそ紛念れと後脇をれども論方るく山寺廣
く紛法みるくい我〜が誤り陽侵よ元たううひ紛りし織布とり
るるい再び徳と協定と山紙よ衆徒一変〜商人の紛〜新
先も正さば〜て其侵よ捨置る乾佛智の志うしむる如
みるく重奉ぐ妙斗の図よたうりたると松永が石寛乃
心を抱きしとうよ合せるく本願寺とたをけるる石寛議
なりし事ども

## 毛利家入兵粮石山事

本願寺乃密使い堺浦より高松と志門らひ中国さして
馳さりしよ石〜乃関西にく智むるり多しとうくぐも日比
通紛せる堺の商人子細よ及ぶまじと其侵よ通をもみ

川辺の
番船
室の
柱若
と
招く

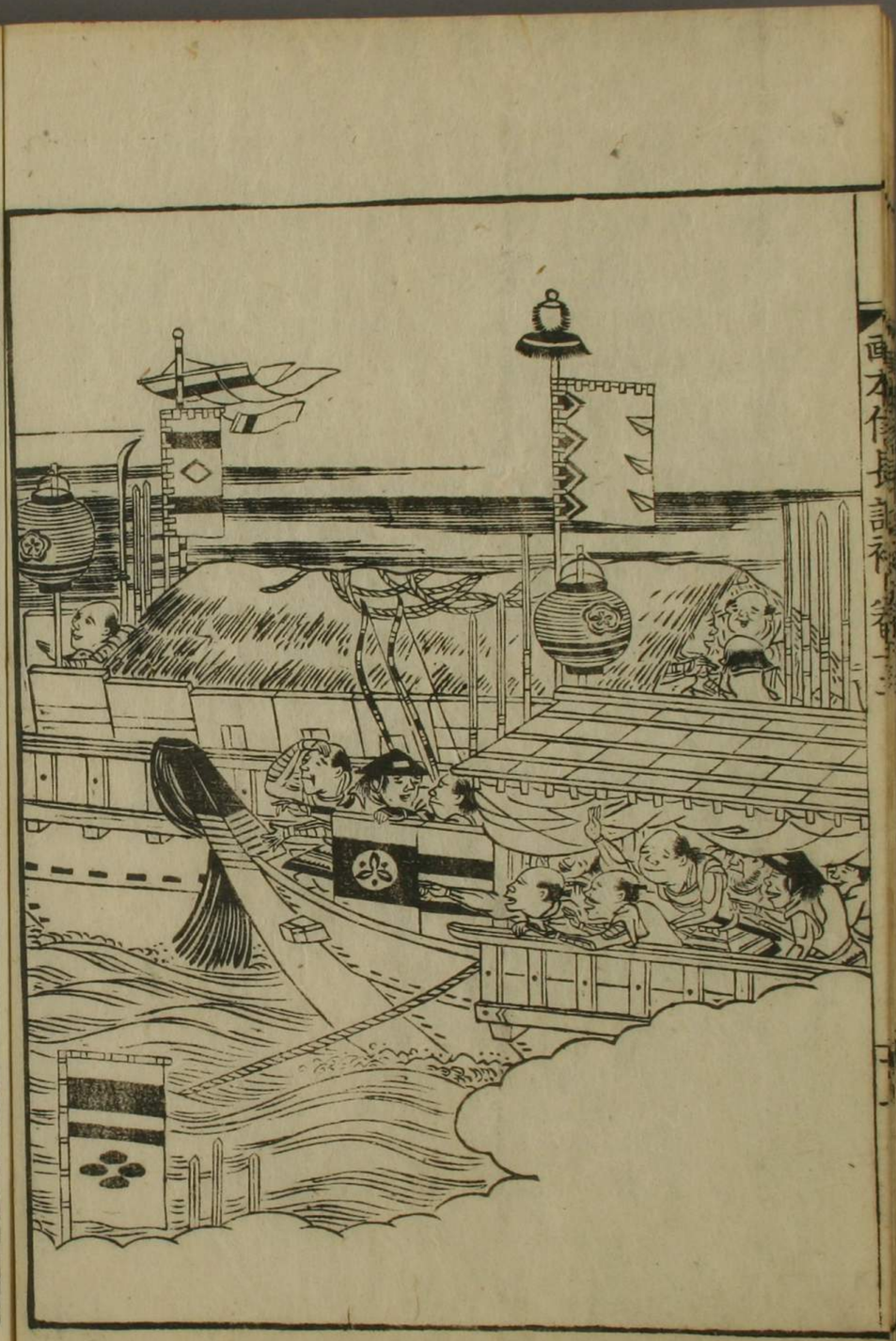


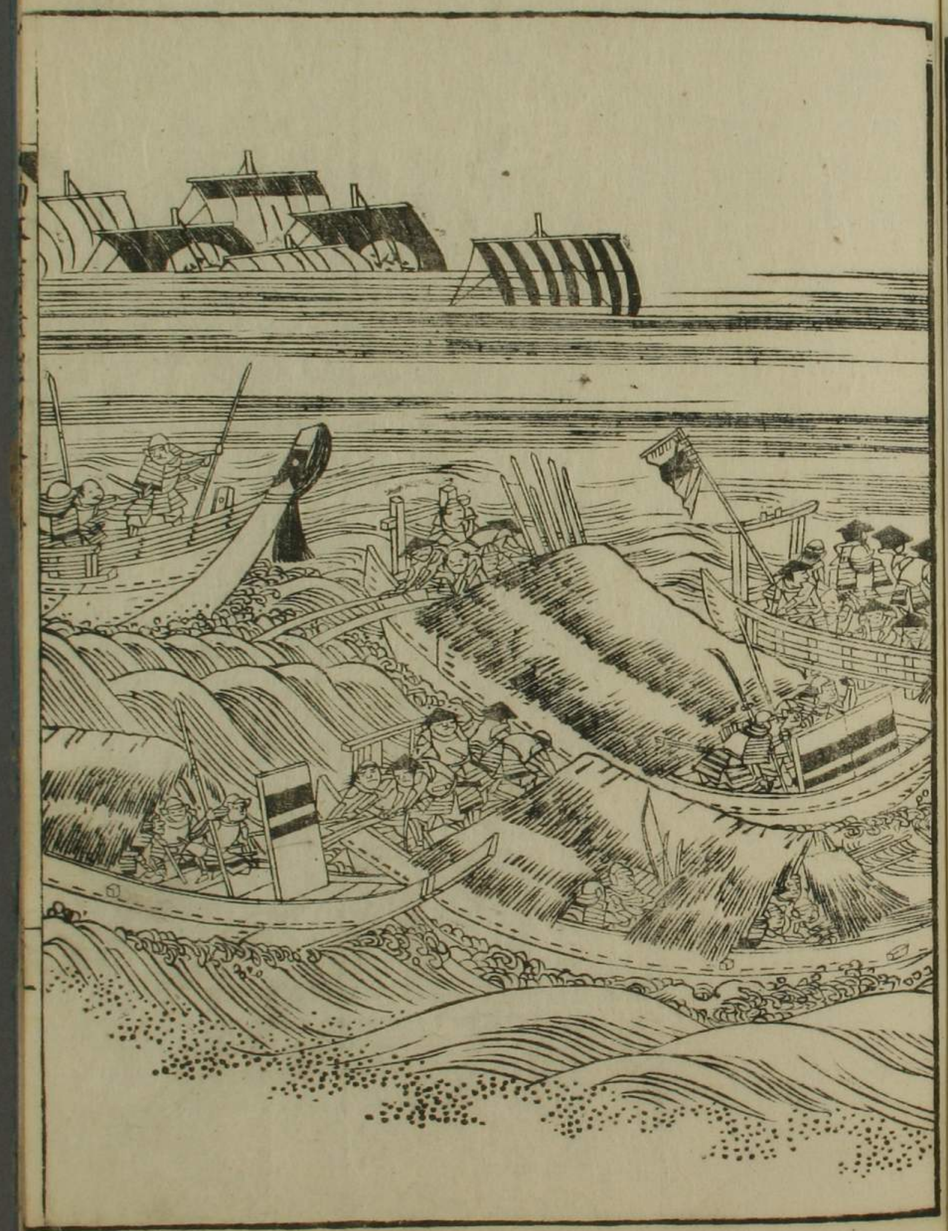


武い紙中荷物等と改る者もあれど竹杖まぐるよい心も
分ぬ何のさうもなくて安藝國より芸岸」帰て廣瀬乃
城より本願寺よりの密使乃告奏者より芸くゝゃ入き
び廣瀬乃家居等られと聞屋け刈其使を密度へ招くより兵
二人乃商人謹で上人乃口上と濱舌」道乃銀雞など物語ろ
しく執達数を書ると彼所杖を刻て上人の御書と宝」ろれば
養着より山頂分と大寺乃御茶に被寵せり毛利輝元
被きれ耶附より吉川小早川の両ねとなき相談」為ふ附より吉
川元春や為ふい近年小田信長勢ひを州郡より振ひ推て
征夷乃軍乃重任をや為り猥りより國くと押収せんとぬ
山ぬ石山本願寺と被却し彼地乃要害より城郭と築

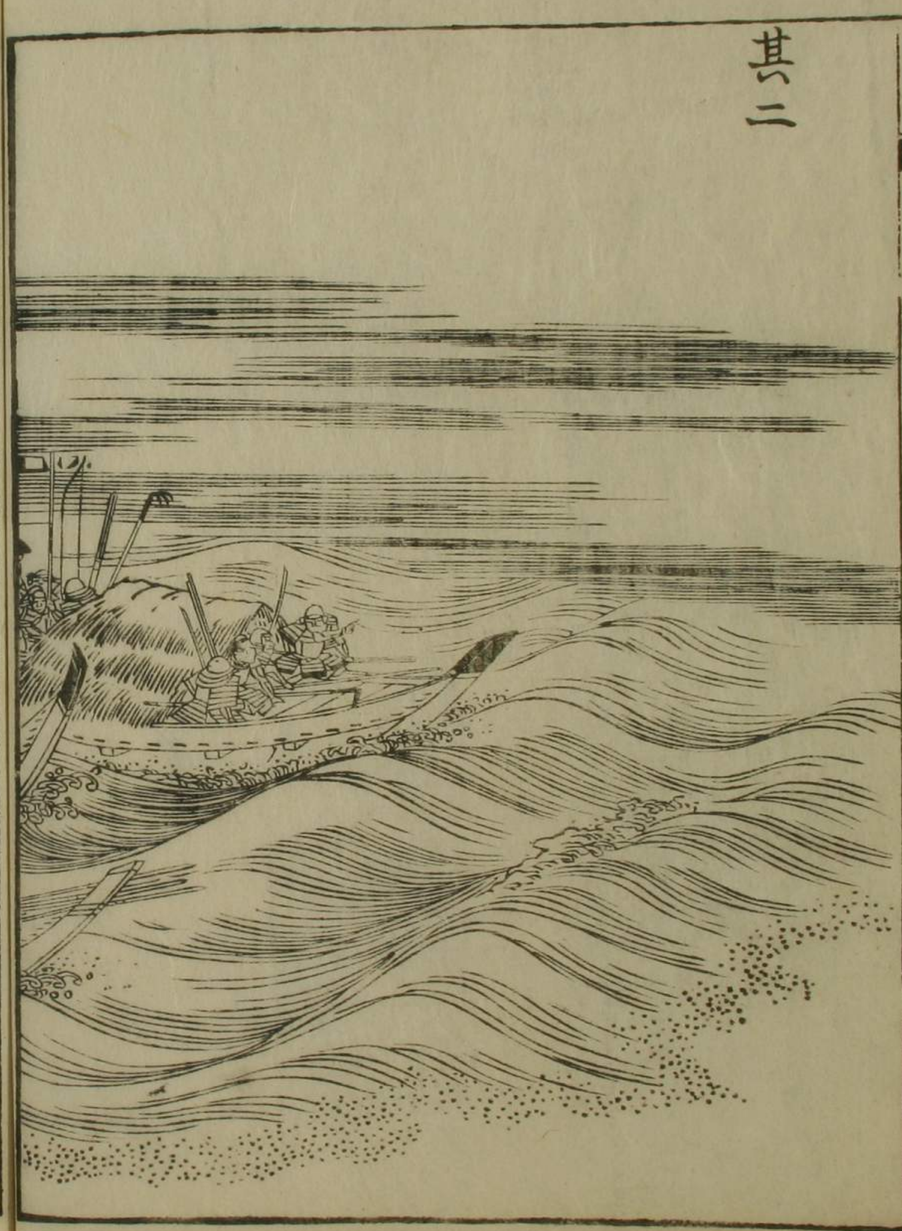
んとぬ是全く当家と讐ひ討んと乃結搦ん抑柳州石
山乃地い西國東國の咽喉なり彼城偏るのあらば信長
亜より兵と当國より出向ぬ故人乃不謂屠彼則當
家とは此乃うり其上当今正親町院御即位の式礼
当家より個進し天下に美国と為」しも敢如上人
乃吹挙より寄附て今度兵粮運送のより彼が願ひ
より應じ偽与へうんこそ当家長久乃計策なるべ
と理義明白よのべらまうり実より抑ひく体裁より及ばれど
重に應じ粮米又十万石貸与へ彼使者と為て御渡
さまうれば彼使者謹で恩と附」情中より重章が書
状と為出し粮米恩備為るよい石山乃軍師鈴木源左衛

重華が
計ごと
川ぶ口
の
番船
を
焼き
る
図





其二



門脇重幸御厨家と中合をる軍奇の密書御披見給へ
ば「こゝ」出せば小早川隆景押板きはゝ大きゝ感じ信
長石山の城を責て度々の敗軍も理なりと謀計「逆」き事共
城せる所よりまゝ兵粮運送をべきなりとゝ虫ゝ合とゝ
して七百余艘の船ゝ十余万石の米粟を積飯田城中守
を乗込るべし船ゝの内ゝは村上八郎左衛門尉児玉内蔵
丞ゝ左衛門遠藤左京田代甚左衛門地武郎を始め
「と」其勢都て三ゝ余人石山の後者を使ひ順風ゝ帆を
開き淀川を「こ」て登る沢い七月廿三日潮くたる潮ゝを遥
ゝ下のはせ〳〵擣掛ゝ海上の無尖浦風ゝ見えつ隠れ
友ゝ多ゝ船ゝ漕もゝ行ばゝ右ゝ八郎擣の浦左ゝの方へ

擣磨路や室の津ゝ女ゝ〳〵待しぬい明石の須磨
の浦ゝそゝ見ゝ山海岸ゝ船ゝ漕ゝ際き飯田城中
さゝゝ給本ゝ伝「人」謀略と紛ゝ室の津兵庫ゝ乃
在ゝ女ゝ数多ゝ引ひ児玉内蔵丞村上八郎左衛門其外雑
兵数十人を「ゝ」中ゝ船長ゝ出せ彼若ゝ十余艘の
船ゝ上の七月廿六日の書方川ゝ船ゝ上せ番船の
傍ゝ漕めぐ「し」後ゝ乃御伽衆ゝ せん石せ給へ〳〵と唱る
ゝ山ゝの御器ゝ労ゝ「善」しゝ給ゝ番兵ゝ共ゝ酒肴ゝ
の給ゝたるぞ石ゝ〳〵酒肴ゝ慢さんとゝ有ゝ給ゝ船
どもより夢ゝとひそゝ〳〵招くゝ引ゝ給ゝ若ゝ女ゝ「ゝ」
ひゝり給ゝ若ゝ衆ゝ「と」ゝ事ゝ給ゝ船長ゝ給ゝ甚国ゝ今宵い

これすて堪能人の数船数多の若造と惟るく積の七栄あ
酒宴の席伽の侍人まくんと呼玉村と物ものしるを聞
るれば夜まうせくたらんよそ番兵等大きふうのしさ
い某ゞ行くゞ若い肉肥脂つき二十ばかりにかさのよう
年ゞ人の接屏射のよう若と思いさうひ素ゞと絡く好
みのさまくを船長ひくれの吾辺で捷の夜乃中そし
其夜いまゞ明ぶる間ゞ好若武佛ひて浜辺の方へ海うる

川分口船軍事

明ゞバ七月廿七日毛利の軍勢飯田城中守兵士ゞ知し百
余艘乃小船ゞ鬼竜の道華六百余人を乗しめ大将小谷
の鉄炮をひくと並べ笘武霞ふく好女の船ゞ乗られひ申



越すう須磨浦を押登ゞば数百艘の兵粮船ゞ続く
走せる好節要風はよく吹て成宋刻ばうゞ川口ゞ洲
ゞ押ゞせうう小田方乃番船ゞもくる謀計ゞ如しと
い義ゞも走ゞ今霞こそ室や兵庫乃好若を家ゞめし
ゞせ武の勢をそうさんものと酒武洞者を求め日乃
暮るゞうゞ今やくと結る小晴夜うれば物のたいろ
い別神ゞ多くの船ゞも燈火のつげゞ見ゞ此不人押来
るい恐ゞ好女乃船うゞと皆船ゞ乗ゞ出くゞ寄へくく
拓きくる百余艘の兵船ちゞくゞと漕ゞ一言の論ゞ
及ゞ鉄炮の背先をそ論くゞとすくゞ走ゞ
ゞけるゞ番船ゞも矢庭ゞ側ゞ配る者二百余人毛利

川角口
合戦

勢数多の松明一時に点じ周を囲てかけ寄せ
番船に乗移りなら敵奉行切立て捨て逃げ
船ありとのこと聞えし敵ふだん心なき小田方の軍兵行
の要害なり番所七頭八戦に斬碎き逃るを追
退くを途を失ひ切殺さるる者麻を乱せるごとし江方に
揮へる小田乃勝くすりたる小田衆を見くをいや川分
口木津雑賀乃砦に籠る敵軍を始つる軍兵を出
敵えよと信長の演説より同猶七日三日清洲城内一
百余人又十余艘の船に乗り一人宇に漕来れば
尼ケ崎より荒木方の勢多余人乃渡を切て押来る
を神明ひろ毛利の兵船左右に別れて弓鉄砲とあ
霰と打出し兵粮を積し大船は鉄炮焔硝を押積へ
攻よつる比番船の中へどうどうと打込ひ誰乃兵
に敵を防べき又神と碎き合を捨てじうぶきるしむ
其中へ船軍に調練せし廣海勢平地と馬を駆るが
ごとく乗に乗り西に向ひ敵船に乗移りていひ切斬
殺し殺撲にかけるやはし八潮に切るびけるごとくう
責ふせるい林に宿る寝鳥を討に矢を射ぬ冷うる
戦ひなり

續本拾遺信長記神篇卷之十三終

丹羽桃溪畫

# 繪本拾遺信長記後篇

全部十二冊

近刻

信長記　全部八冊　小瀬甫菴著

織田信長公一世の勲功爭戦の勝敗を論じ記を

拾遺信長記　全部十冊　籬嶋秋里著

織田信長公石山本願寺と年稽の爭ひ茅後十餘年の戦を記を

織田軍記　全部二十三冊　石川遠山著

信長記と博補して公一代の奇謀妙算尾州の興りてより天下を併吞せる始末を記を

彫刀氏姓名

京都　毋上治兵衛

〃　樋口源兵衛

大坂　市田次郎兵衛

〃　池田長右衛門

享和三年癸亥四月

東都書肆　西村宗七

攝都書肆　譽田屋伊右衛門

和泉屋源七

播磨屋五兵衛